

一の巻より校訂。

とみえる。また同年一〇月一日出の殿村篠斎宛書簡（「曲亭書簡集拾遺」所収）に、

一、俠客伝大坂にて彫刻の筆工五冊、やうやく八月十六日に着いたし候。是も揃ひ次第一冊追におこし候へは、都合宜く候処、板元手くりあしく、此節ニ至り五冊一度にさし越候故、いよ／＼手おくれニ成候。かねてはほりちんいとはす、極上ほりに申付候間、安心いたし候様、申越候へ共、見候へは、半分は悪ほりましり、且ケツを多くさらひ残し有之、校合忤も手伝せ、日夜取かゝり居候へ共、一冊の校合四五ヶ日つゝかゝり申候。先月廿八日にやう／＼二の巻迄の校合いたし遣し候。大抵江戸にても五冊の校合六十日かゝり申候。大坂は又飛脚の往来御座候間、百二十日を歴不申候ては、校合済申ましく候。しかれば、当暮の製本おほつかなく候。万事不都合御賢察可被成候。

とみえる。日記では俠客伝彫刻の筆工到着を九月、書簡では八月となつてゐるのは、馬琴の書簡執筆の際の書きあやまりであろう。日記の「九月二日」には、河茂宛に書簡を出した記事は見当らず、次項八 九月二日書簡「追啓」に対する本簡で、日付の「九月廿二日」の「廿」を書き落したと解するのが一番自然と思われる。次項書簡注参照。

二 櫟亭殿村琴魚 天保二年十一月二日没。享年四四歳。

琴魚の帰郷については、一〇月一日出の篠斎宛書簡（前掲）にもつぎのように記されている。

一、琴魚様御帰郷九月中旬ニ成候よし。今程は御帰り被成候儀と奉存候。宜御致声奉希候。

三 「廿」脱か。

八 「天保二年」九月二日（追啓）

一 辛卯日記「九月二日」

一、予千代楮良著聞集下帙廿一丁の内、昨日の残り十丁校訂書抜等いたし、其後俠客伝一の巻宗伯校合いたし候を、よみかへししるしつけ、再校し畢。尚又大坂板元河内や茂兵衛へ遣し候書状認之。其間ニ髭を剃り、来客重信対談等にて消日了。夜ニ入つかれ候に付休筆。

一、暮六時前丁子や平兵衛より使ヲ以、俠客伝一の巻校合、並ニ美少年録三輯五ノ巻初校直し出来、二はん直しすり本差越之。則同書四の巻三はん校合並ニ俠客伝初校いたし候すり本廿丁一綴、並ニ河内や茂兵衛に之書状等右使にわたし、今夕早便にて早々飛脚やに出し候様申ふくめもたせ遣ス。